

地域農業の展開と地産地消ビジネスの役割に関する研究

【目次】

序章	第 3 章 茨城県における地産地消と直売所 ビジネス
第 1 章 グローバル経済と日本農業の縮小再編	第 1 節 茨城県農業の特徴と性格
第 1 節 日本農業の縮小再編と食料自給率の低下	第 2 節 茨城県における地産地消の取組
第 2 節 乖離が進む食と農	第 3 節 茨城県下の直売所ビジネスの拡大
第 3 節 苦境に立たされる地域農業の生き残りの 模索	第 4 章 茨城県西地域にみる事例分析
第 2 章 地産地消ビジネスの意義と役割	第 1 節 地域農業の特徴と位置付け
第 1 節 地産地消への期待とビジネスチャンス	第 2 節 「下館赤のつぼ」が展開する地産地 消の取組事例
第 2 節 広がりを見せる地産地消ビジネス	第 3 節 I 直売所危機からの展開事例
第 3 節 直売所ビジネスの全国的展開と特徴点	第 4 節 直売所ビジネスの成果と課題
	終章 総括と展望

【研究の目的・課題】

グローバル経済の拡大により日本農業が縮小され、食料消費も変化させた。また、食の安全性が問われているが食と農の乖離によって問題解決が困難な状態にある。これらグローバリズムの問題に対抗して地産地消が、注目され広がりを見せている。地産地消はお金では買えない持続可能な取組である公益が本来の活動であるが、今後は公益を絶対条件として基盤におき利益追求の私益的意味を持つビジネスとしての活動が迫られると考える。では茨城県西地域の農業の中で地産地消ビジネスはどのような持続可能な展開をし、役割を果たすのかを研究することが本論の課題である。

【方法】

課題接近への方法は、第 1 に、地産地消が迫られる背景を参考文献にて整理する。第 2 に、地産地消ビジネスがどのような広がりを見せているのか、参考文献や統計資料から把握する。第 3 に、茨城県下の地産地消を参考文献及び統計資料より把握する。第 4 に、統計資料や参考文献で茨城県西地域の農業の現状を明らかにし、直売所及び加工所の活動内容や成果、課題を直売所や加工所、個人農家を事例としてヒアリング及びアンケート調査をし、その結果を基に現状を把握、検討する。

【結論】

地産地消は第 1 に、「人と人」の相互理解を深めさせた。生産者同士では、生産意欲を高め、地域循環型農業という形で発展し地域農業の活性化につながった。第 2 に、農村女性の立場を確立させ、高齢者参加を増加させたと共に現金収入を得るビジネスチャンスを与えたことにより、地域農業の在り方が 1 つだけではないことを示し、地域農業の担い手の多様化を生んだ。第 3 に、市場出荷で収入の不安定さをコスト削減や廃棄農産物等を自ら販売することで安定させ重要な収入源となった。第 4 に、これらの成果から直売所出荷で経営する農家や生産以外の農業労働に従事する農村女性が誕生したことである。第 5 に、近年身近な商店街が消えたが直売所によりその姿が蘇りつつあり、生産面に加え消費においても不自由な高齢者の支えになっている。事例分析から見る課題は第 1 に、後継者問題である。これには先述した新しい農家形態等をアピールし、家族など直売所に関わる人間も広がった成果から可能性を探るべきだと考える。第 2 に、交流を推進することである。交流が不十分だったり、直売所に重点を置けない状況になっている。これは、特に専業農家に農業が集約化されたため、取り組みにくい環境ができ、消極的になったことが原因だと考えられる。今後は、兼業農家や農村女性、高齢者等がバランスよく機能すべきであると考え。今後公益は絶対的に持ち、私益的意味を強めていくべきだと考える。全国的流通メインシステムに対して地産地消をサブシステムとすることで、持続可能な活動として位置付けられると考えたためである。また、農業が産業として成り立つと共に地域自給も上昇すると考えられる。直売所の課題は地域農業と切り離すことができないため、地域で取り組む必要がある。

【参考文献】

- 中島紀一『食べものと農業はおカネだけでは測れない』コモンズ，2004 年
三島徳三『地産地消と循環的農業』コモンズ，2005 年
高橋正朗『わが国のフードシステムと農業』農林統計協会，1994 年